The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西瓜をたべたねずみ
Author(s)	向井, 夏彦
Citation	makoto. 1973, 1, p. 6-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86290
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西瓜をたべたねずみ

（読人不知）

中央出張所　向井夏彦

当協会環境管理課に転属以来私は殆んど鼠駆除に専念して今日まで来ましたが、その間いろいろと変った失敗談があるので各位の参考ともなればと思い、その一つを発表してみる。

最初は鼠に関しては全く無知な私で、あらゆる本を読みあさり、諸先生方の教えを受け、さて、現場へと行って見ると、本に書いてある通りが、中々うまく活用できず、弱ってしまった事が多々あった。

事件はある市場でのできごと一斉駆除も上々で、毎月の管理作業もうまく行き出して四～五カ月経った夏のころ。ある日電話で「三日前から毎晩鼠が西瓜を噛り、中をすっかり喰べてしまって弱っている。何とかしてほしい」とのこと。

「まさか、冗談でしょう。あの大きな西瓜を、どうして鼠が全部喰べられるのです。猫と違いますか?」と尋ねると、

「いや鼠や、それが証拠に、鼠の糞もあれば、歯型もついているで、一辺きて見てみ!」

私はそれを聞いて全く狐につままれたような気持がした。私は今後の事もあり、また確かめる為にも現場を見たい一心で、その晩早速出かけていった。

市場に着いて当の西瓜を見せて貰ったが、なる程見事に中がえぐられている。だが、一体鼠がどうしてそんなに器用な事ができるのかと合点がゆかない。

そこでいつもの通り、通路の電燈だけにして貰い、かなり離れた物蔭にひそみ、今や遅しとねずみの出てくるのを待った。周囲に人気もなくなり、暫らくすると、くだんの鼠がコトコトと出てきた。目を皿のようにし息を殺して見ていると、西瓜を噛り出したではないか。西瓜に穴があいたらしい、そこから出たり入ったりしだした。出ては体をこすりつけてまた入る。

「バシャバシャ」音をさせている。私は息を殺してソッと近づき、慌わてて穴を塞いだ。なんと幸運だったろう。簡単に捕鼠出来た。あとは籠に移し変えるまでのこと。なれたものである

夢我夢中の一瞬が終わり、我に返ると何だか足許が痒い。よくよく見れば蚤がついている。いちいち丹念に捕って見たものの、可成りかまれた箇所ができてしまった。

殺虫剤を土間一面に撒布し終え、附近を探して見た。店の空箱を積み重ねた一角に、鼠が巣を作っていて、中に蚤が異常発生しているのを発見した。それも、処理し終えて帰路についた私は、つくづくと思い当った。

衛生関係の本の中に昔猫の蚤取り商売があったとの由。彼は声をかけながら町中をねり歩き注文を受けると、その家の猫に布切れで体中をしめらして、持っている毛皮でその猫を包んでやる。蚤は湿気を嫌って猫の体よりはい出し、乾いた毛皮に大急ぎで移ってしまう。頃合いを見計らってその毛皮を丸め、容器に入れて一巻の終りと相成る訳である。代金を貰った彼は、戸外でどのようにしたかは書いてなかった。

また野狐が自分の体にわいた蚤をとるのは、松の木に体を何回も何回もこすりつけて、毛が抜けると鼻先でその毛を丸め出す。やがて抜毛の玉が適当な大きさになれば、口でくわえて、池のふちより後向きにそろりそろりと入って行く。蚤は水をきらって徐々に腰より腹へ、腹より肩へと上ってくる。やがて首から顔、鼻先へと移動した蚤は最後に丸めた抜毛の玉へと、先を争って移ってしまう。その途端、狐は口にくわえた毛たぼを「バッ」と離して水の中にもぐり込み、少し離れた場所へ顔を出す。後は悠々と池のふちより上って行ってしまう。

水の上に浮いた毛たぼの蚤はその後どうなったかは誰も知らない。

たった一枚の毛皮で商売をする人間もあれば、自分の抜毛で蚤退治をする狐もある。要は蚤の一番嫌がる湿気を利用している点に共通性がある。

話は前にさかのぼるが、当の鼠も巣にわいた蚤が体中につき痒ゆくて堪らなかったに違いない。ソーセージや毒餌には見向きもしなかったのは当然である必要は発明の母というが、鼠は鼠なりに本能的に手近にある西瓜を利用して蚤退治を兼ねた行水としゃれこんだに違いない。

要するにこの仕事は、根気と忍耐、その上に意欲ある探究心をもって、経験を豊かにするのが何よりである。

「まこと」の創刊号に当たり鼠にちなんで

梁つたう鼠の道も道なれど
誠の道は人の行く道

（クイズの回答）　右下の一からスタートして左へ進み、うず巻状に「1 2 3 4 5」を繰り返して中心に向かう。

4	5	1	2	3
3	1	2	3	4
2	5	5	4	5
1	4	3	2	1
5	4	3	2	1

編集後記

このたび本協会機関紙「まこと」発刊にあたりましては、ご祝辞ならびに玉稿賜わり、誠に有難うございました。牛年のスタートで〝牛歩千里馬笑う〟にまかす〟とか、これよりさらに、一歩一歩堅実に歩みを重ね、誠実に盛りあげ、一そうの充実を期し、皆さまに愛読され、親しまれる機関紙へと努力いたしたいと存じます。各位の忌憚なきご批評、ご指導を賜わりますようお願い申し上げます。

（編集部・着本秀一）